日本医史学雑誌第三十巻四号
昭和五十九年十月三十日発行　昭和五十九年四月十二日受付

ポンペの動物標本に関する書簡について

石田純郎
ハルム・ボイケルス

オランダのライデンにある自然史博物館(Rijks Museum van Natuurlike Historie te Leiden)で、ポンペ(Pompe van Meerdervoort, Jhr Johan Lydius Catherius)(1829～1908)と当博物館の間で交した二三点の書類をみつけた。内訳は、ポンペより博物館への書簡六通、博物館からポンペへの書簡八通、博物館のポンペあて標本受取書二通、標本目録二通、その下書き四通、詳細不明のフランス語の手紙一通である。

これらの史料は、まず金沢英作氏により発見され、同氏は神谷敏郎氏と共著で「ポンペが日本で採集した動物標本」[1]と題して当博物館に保存されている標本の紹介を行われたが、その論文中これらの史料に対する説明は簡単であった。しかしこれらの史料を年代を追って通して読むと、色々と興味深い史実がうかんでくるので、比較的詳しくここに紹介させていただいた。

これらの史料のうち、一番古い書類は、一八六一年二月二三日付、一番新しい書類は、一八六六年五月のものである。一八六一年五通、六二年五通、六三年四通、六六年八通、不明一通である。

年代を追ってこれらの史料を紹介する。

一番古い書類は一八六一年二月二三日にライデン自然史博物館ディレクターのシュレーゲル(Schlegel, Hermann)(1804

～1884）が出島のポンペにあてて出した手紙である。ポンペが日本でオオサンショウウオとカエルをつかまえてパリに送り、それが評判となり、新聞でシュレーゲルが知ったこと、自然史博物館から博物調査を依頼したいという内容である。[2]

第二の書類は一八六一年四月二三日、ポンペが出島[3]から出した手紙で、七月六日にライデンに到着している。この手紙にポンペは次のように書きしるしている。ライデン自然史博物館ディレクターのテミンク（Temminck, Coenraad Jacob）（1778～1853）、彼はシュレーゲルの前任者であったが、テミンクは、日本における博物調査を最初カッテンダイケ Kattendyke, Willem Johan Cornelis Ridder Huyssen van（1816～1866）に依頼していた。ポンペはオランダから日本へ向けて出発する前、一八五六年十一月にライデンでテミンクに会い、私も博物調査をしたいと申し出たところ、テミンクは即座に、君はカッテンダイケを助けるだけでよいと命じた。そこでポンペは気分を害し、日本で独自の調査を始めることにした。ポンペはオオサンショウウオをつかまえ、ライデンでなく、パリにそれを送った。オオサンショウウオはパリで大きな話題となった。テミンクの後任者シュレーゲルは、このこじれたいきさつを知り、ポンペにわびるとともに、改めてポンペに日本における博物調査を依頼し、ポンペもそれに応じた。その仔細がこの手紙に詳しく述べられている。

三番目は、一八六一年七月八日、シュレーゲルより出島のポンペあての手紙で、どのような動物を送ってもらったらよいかというもので、例として送ってほしい動物と鳥類の名前が書いてある。この中にはオオカミの名前もみられる。

四番目は、一八六一年九月二〇日に博物館から出島のポンペに送った標本用品の目録で、標本を運ぶのに使う大きな標本箱とか、動物をつかまえるためのワナ、文房具等の目録である。

五番目も同種の目録で十一月八日に博物館から出島のポンペに送ったものである。

六番目の手紙は、一八六二年四月二〇日に出島のポンペから博物館のシュレーゲルにあてたもので、ポンペは九州の鳥類と哺乳類をすでに集めオランダへ送ったということと、依頼されていた蝦夷のオオカミを入手するのは、お金がかかって大変むずかしいと書いてある。この手紙は郵便史上も極めて興味あるものである。すなわち、一枚の紙をおりたたん

で、その外側にアドレスを書き、内側に文章を書いたもので、現在のアエログラムとよく似ている。切手も、日本の消印もないが、上海の五月三日付消印、香港の五月八日付消印、ライデンの六月二八日付の消印があり、手紙はマルセーユ経由で二カ月かかって運ばれた。消印以外にもひし型の〈68〉のスタンプ、二重丸のスタンプ、正方形の8のスタンプと計六つのスタンプが外側の表面に二つ、裏面に四つ押されており、日本の郵便史上も貴重な史料と思われる。

七番目の手紙は、一八六二年六月一三日、出島のポンペがシュレーゲルにあてて出したもので、その形式は六番目と同じアエログラム式のもので、九月一六日にライデンに到着している。セレス（Ceres）[4]の標本を本国に送ったとの内容である。

八番目の手紙はシュレーゲルから出島のポンペあての手紙で、ライデンから一八六二年七月五日に出されている。内容は日本からポンペが送った岩石を受けとったということである。これには後日談がある。大荷物の石を博物館で受けとったものの、珍しくない標本ばかりで、ポンペが岩石について素人であった悲しさ、その大半は当時の博物館の学芸員により、また最近の標本整理の際にも捨てられてしまったという。

九番目の手紙は、一八六二年九月二六日に出島のポンペからシュレーゲルへ出したものである。標本箱を確かに受けとった。鳥類の標本を送るというものである。この手紙はハーグに十一月二九日、ライデンにも同日付で着いたという消印が押されている。

十番目の書類は、博物館のポンペあて標本受取証で、一八六二年十二月二七日付、博物館は確かに二箱の標本箱を受けとり、その中には一三種の哺乳類と一〇六種の鳥類があったというものである。

十一番目は、一八六三年一月一五日にシュレーゲルからライデン近郊のボールスホウテン（Voorschoten）に帰国していたポンペにあてたものである。

十二番目は、一八六三年九月一九日に、ハーグのホフスパイ（Hofspui）No.1に居たポンペからシュレーゲルに宛てた手

紙で、日本から送ったポンペの標本箱はカリプソ号（Calypso）の遭難のため一つを失ない、一つのみ残ったというものである。

十三番目は、同じ紙に同じ日時に書かれたシュレーゲルからポンペへの返信である。

十四番目の書類は、一八六三年九月二八日付の博物館発行のポンペあて標本受取証で、前記の遭難による荷物の滅失のため、一つの標本箱の十種の哺乳類と、三五種の鳥類の受取証である。

十五番目の書類は、ハーグ在住のポンペが一八六六年五月一〇日にシュレーゲルにあてた手紙で、ポンペは二つの標本箱（鳥類・蝶類・貝類）と共にオランダへ帰国し、標本箱はライデンにすでに送ったという内容である。

十六番目はその返事で、五月一四日にシュレーゲルからポンペに書かれている。標本を送ってもらったお礼であるが、鳥類の革、貝類の状態は良好であったが、蝶類は変質していて使いものにならないという内容である。

十七番目の書類は十八番目から二十三番目の六点の標本目録と一緒に包まれていたフランス語の手紙であるが、古いフランス語で書かれているので、日付、内容、差出人、受取人は現在のところ不明である。

十八番目から二三番目の六点は、ポンペによりもたらされた標本目録である。六点のうち、二点が清書で、他の四点は下書きや、作業の途中に作製した仮目録である。

二点の清書のうち一点は、一八六六年五月に、ポンペの書いた貝の目録で八頁ある。ライデン大学日本学教授ホフマンが、カタカナで日本語を添えている。そこには一七三種の貝の名前が整理されており、例えばナミノコ、ヒガイ、ケンジ（ママ）ムラサキ、カガミ、ヒメガイ、ハリカネ、カラネコ、ムラサキカイ、ウスサクラ、カブトガイ、カサガワ、タケノコ等が添書されている。おそらく長崎地方の貝類の名称であろう。

もう一種の完成された目録は、二枚の紙にぎっしりと、ローマ字だけで日本語の貝名が記されたものである。

未完成のリストには、下書きが一点、四枚の長い台紙の上に短冊状の二〇〇種のカードをはりつけた書類が一点、それ

を写しかえた三枚の書類が一点、細い短冊にした予備あるいは使いかけの紙九枚で一点の計四点があった。

したがってこれらの史料を通して読むと、ポンペは最初博物学に興味を持って、ライデン自然史博物館ディレクターのテミンクと面会したが、不愉快なあつかいを受けたため、独自に調査を行い、オオサンショウウオをライデンでなくパリへ送ってしまった。それを知った後任のディレクター、シュレーゲルはあわててポンペをなだめて、改めて博物の調査を依頼し、ポンペもそれに応じ、鳥類、哺乳類、貝類、両生類、蝶類等の標本をライデンの自然史博物館に送った。その一部が現存していることは、神谷敏郎、金沢英作氏の論文[1]により明らかにされている。

（三菱水島病院）
（ライデン大学）

文献及び注

（1）神谷敏郎、金沢英作　ポンペが日本で採集した動物標本について　日本医史学雑誌　三〇巻四号

（2）出島はシュレーゲルにより Decima とつづられている。箱館のつづりは当時一般的に行なわれていた Hakodadi でなく、Hakodate と正しくつづられている。

（3）出島はポンペにより Desima とつづられている。

（4）セレス（Ceres）については不詳。

Letters by Dr. Pompe van Meerdervoort Concerning Japanese Animal Specimens

by

Sumio ISHIDA and Harm Beukers

We found 23 letters by Dr. Pompe van Meerdervoort concerning Japanese animal specimens in the Leiden National Museum of Natural History, the Netherlands. Information regarding the condition of the specimens in this museum is contained in the article "Japanese animals collected by Pompe van Meerdervoort" written by E. KANAZAWA and T. KAMIYA. There are 6 letters which were sent from Dr. Pompe to the museum, 8 letters from the museum to Dr. Pompe, 2 receipts of specimen by the museum to Dr. Pompe, 2 lists of specimens, 4 prepared papers for the specimens and one letter in French. The oldest of these is dated the 23rd Feb. 1861 and the most recent is from May 1866. A summary of the content of these letters is as follows. Dr. Pompe van Meerdervoort visited the Leiden Museum of National History in Nov. 1856 before his departure to Japan. He met with the director of this museum Mr. Temminck. Mr. Temminck did not treat Pompe politely, Pompe became angry and began investigations of the natural history in Japan by himself. At first he sent a specimen of a salamander to Paris, not Leiden. Temminck's succesor, H. Schlegel, apologized and asked Pompe to continue his investigation of

natural history in Japan. So Pompe sent specimens of birds, mammals, shells, amphibia and butterflies back to the Leiden Museum. Some of these specimens are currently held by the museum.